

# 大学生の死生観の検討

0907005

橋 遼介

## 【目的】

平成 24 年度の人口動態統計(厚生労働省大臣官房統計情報部,2013)によると、自殺による死亡者は全死亡者の 20%を超えている。近年の若年層の死亡原因の 1 位となっておりまた、死を迎える場所が 1977 年を境に在宅から病院へとその比が逆転し、今では 8 割の人が病院で最期を迎えるようになった。これにより非医療従事者は死と出会う機会が減少している。

「死」が若者にとって身近ではなくなり、代わりにテレビなどで第三者の大量の死の報道が流れてくる現代、何によって死生観は形成されているのかを調査することで、今必要とされていることは何かということを一考したいと思う。

本研究では死別体験の有無だけではなく、死別した対象、死別した際の自分の年齢、死因、予期の有無を尋ねる項目を作成し検証する。

## 【方法】

質問紙を北星学園大学の学生男性 38 人、女性 65 人の合計 103 人(18 歳~24 歳)に配った。

死に対する態度を多面的に測定する尺度(丹下 1999)を使用。尺度は「死に対する恐怖」「生を全うさせる意志」「人生に対して死が持つ意味」「死の軽視」「死後の生活の存在への信念」「身体と精神の死」の 6 つの下位尺度から成る。

死別体験について：現在までに身近な人や大切な人との死別を経験したことがあるかを「はい」「いいえ」で尋ね、「はい」と答えた人には死別した人との関係や自分が何歳のときに死別したか、また死因についてチェックリストにして尋ね、そのあと亡くなる人の最期を看取ったことがあるかをたずねた。

臨死体験について現在までに自分が命にかかわるような病気や事故の経験があるかを「はい」か「いいえ」で回答してもらった。

死についての思索頻度について死について普段からどのくらい考えるかを 4 段階で回答して

もらった。さらに特にどういった瞬間に死について考えるかを自由記述で答えてもらった。

テレビについてテレビをよく見るかについてとニュースをよく見るかについての 4 段階で回答してもらった。また、死を取り扱った番組について 4 段階で答えてもらった。

## 【結果と考察】

死に対する態度尺度について、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果「死に対する恐怖」、「生死選択の権利」、「死後の生活の存在への信念」、「生を全うさせる意志」、「生を全うさせる意志」といった 5 つの因子を抽出できた。なお、各因子の  $\alpha$  係数を算出したところ、すべての因子において、十分な信頼性があると結論した。

今回の研究の結果として、死について考えることと生への意欲が低くなった。その背景としては人生で苦しい瞬間に死について考えるという人が多いためだと考えられるということがわかった。私はますますデスエデュケーションの必要性を感じる結果になったと思う。なぜならデスエデュケーションは、一人で考えるには難しい「死」という大きなテーマを、知識、価値観、感情、技術のレベルの 4 段階にわけて、順番にじっくり「死」について自分の考えや感情を整理し理解する助けになるものである。だから、つらいときにすぐ死にたいと考えてしまう現代の若者の心に、デスエデュケーションのような、冷静に「死」がどういうものを自分ひとりだけではなく、誰かと共に考える機会が必要だと思う。

今回の研究で完全に死生観に影響を及ぼすのは死の思索頻度であり、女子大生は人生で苦しい瞬間に死について考えるという人が多いとは言いきれない。今後の課題として死生観への影響をみるのであれば、一番印象に残っている死別について尋ねることが必要だと考える。

(指導教員 豊村 和真 教授)